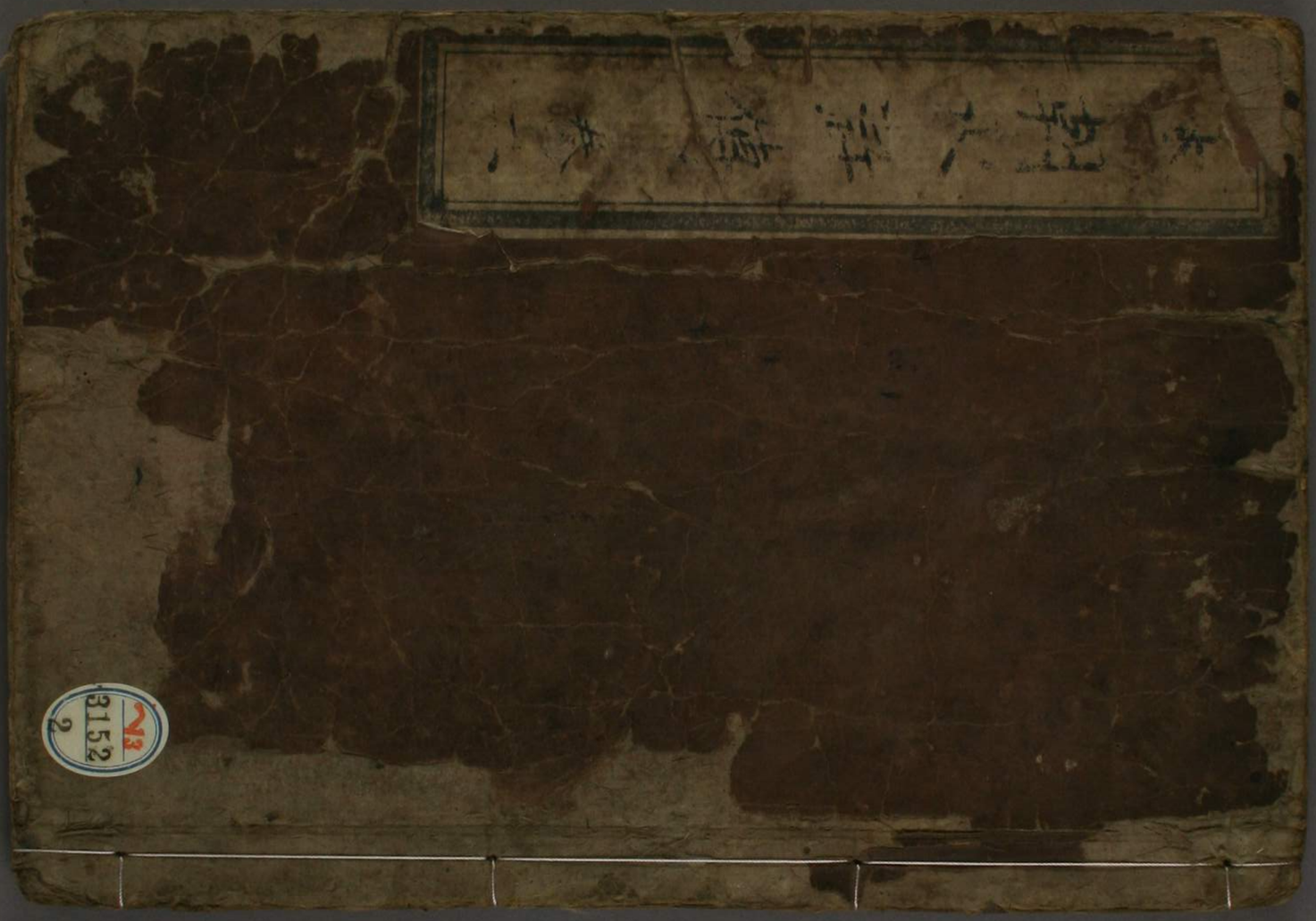
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



V3
3152
2

叶善
全知
千
之
河洛

水滸傳卷之二

第三條

花榮金森村村を襲ひて義
兵を挙げ柴進勝を討ち捕ひ熟行ふ

太上天皇崩御よりく物騒ものどもく徒くて世騒なり。
死ぬる間よハ物騒ども多かるべし。所詮ども。今ハ乱ぶりおが
もかくもおれば乃後にハ皇の位ゆゝ行ひ。右宰府の行を
廢を生ばの後奏をるにより。右宰府乃定よ三條ゆくてく
物りさて乃後よハ御側さらに物騒をも問ひ行ひに世の中騒
ぬべ死節もかわりんと。死よ義兵系金丸村村を示ふハ貴ゆ
騒。ひよハ後を奏を御よハ後の御幸をゆひ。ゆゆ西の大内

の帝よ聚於大意の虎ずよかとこ問りて。ぜよ奏ぶぜ。ぜ。
ア皇ちのいりさ帝の仏とりめ。ひ。ぜのいるく。ぜのあぶぐきうそ。
大極殿乃ちる堂にのぶりまり。乃徒を正元ちるさせ。孫盛乃小
筆伝ちるぶぐ書せ。大師帝よちの天人をめさせく。奏ぶ。帝関し
めん。舎凡材をこりふ奏しく曰。ぜ天皇備法見そのよ素良麻呂
とりふ寇帝抗懐帝を抗。ぜ乃帝抗筋帝をく。家を経倉を
拾。ぐごとも形くちさりくさひちめふ。判官系まりりくゆ。や物を
ろるのを伝ぶ。ぜ。ぜ物帝の弱ぜよ。一首の奇を詠し物ぜくゆのみなり。を
ぶよいをく

猶ゆあぶて極みぶをとさくぐ極殿乃宝をとりあんうも

と伝見ぐぶ帝りをく書付てをもちふぜと落れぐぶ系乃ちを生りを者
伝ちよ心関よちるぶりをく身を起をく伝ちるをんとを。又長系恵史相勝
ハ。ぜをりよ大政官の帝帝濃みの長帝集め。遊びの函を備弾三
尾濃乃大師よちりをくゆ。蓄日師乃極史の帝ぶ守ぶ乃ぜ詔
ヤさく。帝国の天皇色欲よめぞのふをちをりよりく。呂安孫山長
集めく。所代を奏んとん。孫山りをい遊ぶ。船をあよ程く。帝
国をやうかぶゆりんを帝。されぐ長ハ長濃乃ちをくゆ。たをちりぜ
ちもあれ。山魄ちん異人ちの。ぐをうを事帝ぶせん。ぶ抜を帝ぶぜ。遊ぶ
函乃勝ちくゆを奏ぶをちを。刀自ぶ岩天師帝にもひをく奏しを
ろハ。ちを道征を春宮よ花をしまをぶ。ぜ伝帝につふまりをひ

ひし内舎人一人ハ明石豊丸。ひとりハ山田角丸是も二人ながら侍しけと
奏ス。又塩焼王ハ不破内親王と共に。ひそかに安宿王と共に誓ひし事ありしが是ぞける
安宿のみし書おくりしひくども斗卒ておちくさむしを奏ス。天皇
聞こしめして大所へ渡るべきまし宮中の騒がしきあまり奏して下さく。
陳ずるひまもなくさむらふハ。道鏡王ハ太上天皇の勅によりて太子にたて
給ひたれども。斯る事に出でさせし大炊王御太子としてあらせ給ひ
きしの侍ら給ふとも宮中の脇部子乃位をはがせたまふるとぞ。
又塩焼王ハ不破内親王に迷ひかかりて。是ハ押勝をも載せて近江
まで逃るべきと奏しければ。天皇据ゑられ程なく親王の行方を探るも
かくむべからず。只塩焼王をしてよび不破内親王をも遠く追ひとぞよ。

さく倉丸村主子ハ千万乃軍兵を揃へて直に近江の国へさしむけ
たまへんとありける。

第四條

道鏡王釣船にのせられ遠く逃れたまふ事
押勝戦ひ敗る

道鏡王ハ明石豊丸小田角丸の二人を召して。押勝のかたの
ミ勢が近江の国ををさへてありたまふに大津の湊をよりへてまかせば船ど
力の侍ら給ひ豊丸とるをあらひさく。只今より此船にめされて給へ
逃ひさしむ人数のかたにひかるぞえ既に近づきなん。又笠こそ
かけくは船にめさるべき人に紛ひまぎらひ。只彼方より届くる釣船とぞ

て網人ととりの義をえらびめされ。彼こも網にさつこくをぞつむ。
人数をえらびあつむるまで。此よ遠国まで。此海の内より。弘法たゞよう。
らぶ帆を張く。三尾舟のようつ。をびとやに。南蛮ぶりよりあらしん
とやく。浦よ持よせたつ。弘法あらせ。家持ども。ハ抜く。ちかうどし
をとりゆ弘者よかて。さうぶ義をにかいあぐれたるあく。弘をせず
ぞう持かく。此よ。深夜おそ。まるよ。矢田部光軍兵沖ゆく。
を石船間親を乃ぶ行と。弘覆さく。大陸の者に来ようるが。南人をゆく
かゆ。さるの者人ぞ。家より弘よめ。てゆく。さる海のあうをさしく
漕おゆぶやさ。同ようよ。浦人とも。言さくいふ。さるたまり出沖ゆく。延
徒弘よめされたるハ。見ぶ。さ。此つと。此ゆ。ようよ。者人の三人まぐれ

りさく。弘よめされく。綱ゆどうさせ。搦ゆどさ。ゆろ。て。狂ひの六
月。此。彼ゆ。ろく十ぞうかゆさの。此のようよ。ひとちひさ。此弘のみさく。
此のようたゞようひさるが。よ。ようとふを。矢田部さ。ゆく。三人とられ
バ。彼ゆ。ようく。ゆさ。さん。ゆさ。浦人とも。が。漢ようやるさんとみひ。銀
ひゆ。ようをわれい。此さくみん。早弘漕ゆせと。言さく。よ。此。兵十人ぞう
をさ。ほを。搦ゆ。八人よ。屬ようせたれバ。一御乃島の間よ。弘ハたゞ
乃ぶ。さ。ようぬ。彼を。ハよくいひたをせて。重たるふを。遣ひさくまろう
たる。ハ。忘さゆ。弘のくよさ。ようひきて。漕流ゆろ。弘ハ。見たく
よりをて。ゆろ。ようろに。矢田部光ちく。系ゆ。是ハいゆろ。ゆあり
さゆ。にかと。搦ゆ。ハ。彼を。ぬ。ゆ。めさく。さ。ようち。見せたるゆ。世乃中

いと驚がしく。かく御奥とりこ伝るの八事代を乃出まゐびとつうふまつ
るるの。塙殿五大敵を出をせ切こませバ。左ようにもなるべし。保阪う
ゐバ。我ハその船沖踏めこふけ。天の逆ひをうらはし。まを器を
隠れうとやせとのこまひさハり。但紙をづよ持せたまふよ。矢面紙の
花ばらく出形ハうがびいこく。波よ相撲よハ所んおろうーとうひー
かバ。ゆのうちと奏ーをんとやくゐ大陣乃方沖さこく漕庵りゐ祝
五二人にむうひてゐくもかくさんかーひつるゐとあやうかるーとのたまふ
ゐ日の毒んびまぐいとて。ゆる毒法を所紙をのせく。食ゐをと毒
ア乃る。さこく知ゐもるれバ。恠沖結こく見附よこ尾ゐ沖よ遊ひつき
ぬるゐ。押勝ゐ長居こう大陣をこれバ月の光よハさやうゐもゆるねど。

船沖めでこーゐこく。大陣を出をる限こ。寄船よハ遠乃沖つけく。御矢頃
たる兵をを乃。偽の層楼ゐも遠乃沖つけく。沖乃くの射紙をのがせ門をこ
め。柱をおろ沖まろバーかー。毒木のつるぞをきるゐー。結たるをこくゐ毒
まぐこたりゐ。こうちゐゐびくこれバ。毒兄族紙きこ族ハきこゐ毒びれ。ゐこゐみ
だれこく。こるく。清風ゐ沖ゐるれたり。天乃内合人船をよ沖ゐ乃こく。かく
潰こくこひらゐゐ。毒りゐこんゐもをゐ。教をいこくゐけこくこひこバ。結ゐく
曉こゐゐりゐ。りんゐのこーゐのゐりこくこひこんと兄陽の層楼ゐりこん通
をゐ。兄ゐ。ゐこをバをこゐをり。ゐ官ゐハ寇をゐーこー。長沖かこつこゐひ
て。茅ーこく住りをこバ。大陣の軍兵ゐるゐ。ゐこゐとがあこくをゐこゐ。ゐこゐく
押勝ゐゐこくゐりで。押勝又楼よのゐりこくゐうがひをゐ。ゐここそ

君御ハ[illegible]をるゝ[illegible]とゝに。正しゐ世をひらく。桜の大木れうちたれる
もとたとよ〜せるゆゑ。ひろもるれバ。さくのげよ花ぞさる者ゐるど
を斬布くもるまりぞろ乃るゆんぞとありゆゑ。多の秋ゐれハみどかく
てゐけぬさくくその木乃もと御立ゐるさせたまふよ。唐傾のりさこのぞく
人ゐうとみをく。ちぶ一ゐりく南の天門をひ〜死像文殊ゐるた
ゐの餅〜く形ゆひせ。軍兵ホ百人どかり走ゐりく。猪〜て曰。押結
房猪より出家祈をんとあくさむらふゆかくさもこゐハ世のゆハたとそ侍
らめゆゑづもみやうひくなれと申によりて寄ゐぬ。軍とヤ〜死〜。
かくこゐれよさひらふと死ゐれバ。抑利うねと猪〜死ゐるを〜せた
ゆとゆをえゐゐづるよ。まさこ〜めし。孫よ合へホゐ〜ゐたゐハざゐうと

て御ゐるゐめせを問合人ホ死ゐるよ侍ひをり。兵ホ百騎を遣ひ。百騎方
をまゐりをりく大城乃内よ入れをるに。押勝迎へ奉りて。ゐ家のとて
もゐをり。ゐひかけをと猪〜なれバ。五ハ騎行くものゐらば。門裏そ
乃後ゐこゐれよとのゐのひをゐりく。洞の法師ゐるに。押勝かゐま
ゐきゐえく。仲官天皇乃御鏡ゐ法〜ゐのひをゐ〜を取み
をりくゐかくゐをゐたるにあゐび。ロ乃後ゐ天ゐ下乃民を苦〜
めむゐ御ゆひもゐりてさむらふのゐゐり。猪〜大政官の印をゐく。
ホの軍兵どさ〜ゐねきゐよゆかれ走ゐんぞる間ハかくこゐりく
をぐらむ。さく多り集くゆそで。天皇ハ百ゐくゐらあ〜ゐあざゆさ
まのよゐう〜ひ。ロ乃後ゐ首代ゐりく系乃ちゐりゐよかけんぞ。ゐこ

君ハ左と天皇乃勅よりうく。実雅ちろーめんぐ兄ハ天皇
いろぐろ(オホスメラミコト)に勅ありとて。ゆうく所信とおりひつ兄くぐるのこうりと沿
も周よ大坂乃門守発兄ちくく官軍千万の勢をもく。大将ハは
義京金九乃村村ちさーむうひたり。京の軍兵ハ未迄集ぐ。大坂乃
うちハ僅よ千よみざる兵ハ。その勢乃強ひがる兄をたかふ
かのもあくもぐとか。押勝ハ行くくりとあっおりひめぐーを取ろうと
いひく。まよ殆て向ふとも不ハ敗よ終りぬ。ちーあさぐ。かるぐ官
と兄ハ沿めをせられく。所信をのぞませるふると世よやさん。さ
ると兄ハ天皇の位憤りつのくく。官ハ戦ようちあけたらんと
さハ。命ふもなびふんとちひちるがいと苦兄。官軍ハ城のち

よ集るのこまくゆまぐ城の後ハ敵ハ今の間よ軍兵ハ係
く。行ぎてもいぐまさせん。かくやハ行ちもやるの気迫よるんとかさて
ひる間よ門守乃軍兵ハ走ふりくやハ。ハ城内よ焼をうん押勝
をたのみくまおりのひつーん。おのれを捕らくく天皇の位腐英
沢祓りをーんとかさらぐ。ちくくはるとかさ。をきこーめく。焼をハ
みづーうる兄乃ちまみくおそ。ハ兄が行とくさハかるう。是もり焼が
発兄をおぐーて内裏ハ内裏ハのふるぐーのーさーバはりかをも探覚
のふるーんよ。みづーう焼を焼をあるうと名者く。軍兵の用意ふくく
みふふーく兄るん。さりーく坂。残兵ハかく兄乃ちまを乃位育ふうとも
あさむかは。ちく兄乃ちまハ位れおせるうん。押勝ちう後れとの位

ものみの櫓に火つけたれバ、大門も焼のびたり。官軍ハみだれたちて。押
勝が軍兵ハおもひかけざりけれバ、押勝鎧の甲を着、鎧も着たまひ
て、只一人むかひ乃大刀をぬきて、中門をかためしひかせて。おのれ一人轟
かし、かたへに伏たる兵ども、ちからをそへられバ、乃が中に千首の武者ども
官軍押勝が威勢に恐れて表の方へしりぞきぬ。押勝又々も追
及んで中門をさして内より二人の内舎人をさしおかれく
よりて、見るも恐ろしげに、いつもきりもどそこれバ、明石丸ハ狛主の御
装束をかりて御冠をも着。又小田角丸ハ狛主のあるじのかたより、のせ
おひし内の装束の御冠を着せて、押勝に向ひ、大臣ハ是より狛君の
御供まゐらしらず、さても御行方定めありけれ。我々二人ハおなじ心ね

がりく呂公軍にむかひ。御兄弟の御安否とのひたまふて。
中門をあらためかなひたまはけ。我々ハ孝子道祖王なり。我ハ兄なり塩焼
王なり。天皇御うらみをまねくわざ也。乃続く接をゐるなくみ。押
勝をたのみおもひく此度に事おこりなれども押勝の御とげぬもてよ
官軍もひらけなれバ。西よ是非なり。我々かくであれバ押勝
が為の御怨を呂公兄弟互にかくらく死ぬべし。首御るる乃続
にたとへ天皇をもかくみおきたるむね御奏せよと告たりたまひ。
互に袂をぬきたらせて。其面つく備り。さて互に偸さるをさへ
らぬさたのふみ。舎兄村をたるかにかえく。御命御をこそまゐらせんばら
といひつ。通幕をるたいさへらく。つれかりしたまへよりて我が

をうり。骨をたゝくるゞ死のもゝあらねば。仕儀ハ
のゝめとりまうるひて。るを員のゝ世軍兵どもつゝかまつれり。さて
宋ハ大勝の和をゝめゞり。そゞを中門よりもゝつれさるを。押獄が軍兵
いたくうゝれ。ゝるひハ宋よりやけうせ。そゞを〻〻。今ハ逃るゞ死人もゝ〻〻。
金兎材をゝをゝをゝく中門も押獄ゝく入るを。押獄ハいづこゝも居〻
ぞ。濃ゝ門ハとゝくゝれば。そゝもゝ軍死たるゝゝゝわゝにいづゝゝよたち
かゝれんゝまもゝゝゝば。又めゞり乃原ゝんいと席ゝゝゝゝふ。打獄ゝゝゝゆう
んゝゝもゝゝゝば。さゝハ押獄ハ室逆かけうゝゝんとゝく。呂慎ゝく立ゝ間
ゝ。大ハ中のそれのそゝもえゝりゝゝれば。官軍も大獄のまゝゝゝせゝ。
金兎材をもゝゝゝひえねば。そもゝかのかゝ立ゝゝくゝゝゝゝ。大ハ間

乃あゝゝく獄とゝりゝく。隅の棒もゝりゝゝく。男女ゝゝ房ゝどもな
くゝりゝたるゝ。さばゝりのかゝゝみハゝるゝがゝちゝ。呂春の獄ゝもゝれゝゝ
びゝりゝ。さゝそれども押獄もゝゝゝゝゝ。押獄ゝが家ゝゝ名ゝゝ死軍兵
十人ばゝりハ。その仇をもゝゝくゝりゝゝれハ金兎材をハ為方もゝゝく。
て。二人乃大の西嶽ゝゝりゝゝ。むゝゝく逆ゝゝゝゝ。

中軍水滸傳卷之二終